

# 柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌  
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1  
 柿生中学校内  
 電話:070-1503-6401、044-988-0004  
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>  
 第112号

シリーズ川崎の歴史を知ろう！  
 「川崎の文化財」-12

## 岡上栗畑遺跡(岡上-4遺跡) 一岡上廃寺一 (3) ===川崎市域における旧都筑郡内の遺跡===

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 栗田 一生

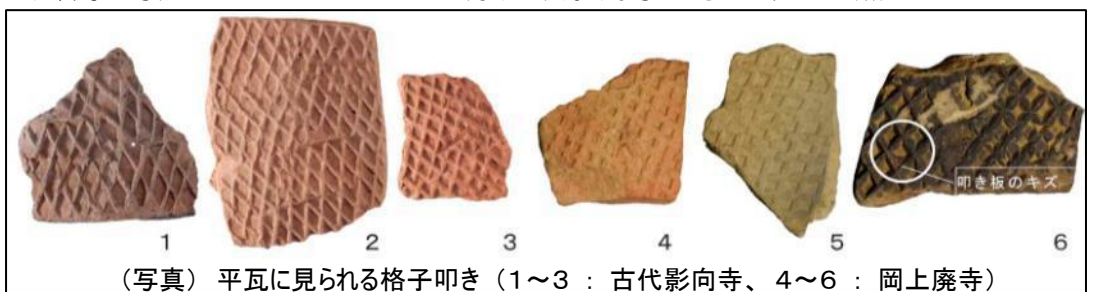
川崎市域における旧都筑郡内の遺跡ということで、麻生区岡上に所在する岡上廃寺(岡上栗畑遺跡[岡上-4遺跡])についてお話しする3回目となります。

さて、前回、岡上廃寺推定地からは古代の瓦が多数出土しており、その瓦の大部分は、隣接する町田市三輪町で発見された三輪瓦窯跡で生産された瓦であることをお話ししました。右の地図のように、岡上廃寺推定地と三輪瓦窯跡は、目と鼻の先といって良い程、近い場所にあることが分かります。しかし、位置関係としては非常に近い両者ですが、近世以降、前者は都筑郡、後者は多磨郡と別々の郡に属し、それがそのまま現在の、川崎市と町田市という別々の行政区域に属することにつながっています。ただし、これまでの研究等からは、この岡上地区と三輪町周辺が、古代には両者とも都筑郡に属していた可能性が高いとされています。とすれば、この位置関係から、まさに岡上の地に瓦葺きの建物を建てるために、同じ都筑郡内であった現在の三輪町に瓦窯を設けた、と考えることが自然ですが、以前この『柿生文化』の誌面でお話したように、川崎市内で最も古い寺院跡は、宮前区野川に所在する影向寺境内に眠る古代橘樹郡に造営された寺院跡で、概ね7世紀後葉の創建と推定されています。下の写真の1~3は、この古代影向寺の創建時に使用されたと考えられる平瓦です。格子叩きが特徴的な瓦ですが、その右側の4・5も同様の格子叩きが見られます。この4・5は岡上廃寺推定地から出土した瓦です。岡上廃寺は、現在の所、8世紀中葉から後葉に造営されたと考えられていますが、古代影向寺の瓦と岡上廃寺の瓦は良く似ていますよね。しかも、胎土・焼成等が非常に類似しています。違いといえば、岡上廃寺推定地出土の瓦はほぼ同じ大きさの格子叩きであるのに対し、古代影向寺の瓦は、格子叩きの大きさが小さいものから大きいものまでバリエーションがあるという所くらいです。



(図) 岡上栗畑遺跡(岡上廃寺推定地)と三輪瓦窯跡

ここからは私の推測になりますが、発掘調査等で発見されている瓦の特徴からは、まずこの三輪瓦窯跡では橘樹郡の古代影向寺を造営するために瓦が生産された可能性が高いと思われます。そうすると、橘樹郡に造営された寺院に隣の都筑郡から瓦を供給したことになります。古代に寺院を造営する場合、瓦供給窯は同一郡内に存在することが多いですが、古代影向寺は、出土した瓦等から、創建時に隣接する荏原評(後の荏原郡)からの協力があったこと、その後、武蔵国府からの支援を受けていたこと等も分かっており、一地方寺院という枠に収まらない寺院であったと推測されることから、隣接する都筑郡から瓦の供給を受けることがあってもおかしくないといえます。出土している瓦から、それを裏付けるかもしれない証拠もみついています。写真6のように、岡上廃寺の瓦に見られる格子叩きには、叩き板の傷が見られるものがあるのに対し、古代影向寺の瓦では傷があるものは現在の所見つかっていません。これは、古代影向寺の瓦が三輪瓦窯跡で生産されたと仮定した場合、傷のある叩き板を使用された岡上廃寺の方が後に造営された証明といえます。おそらく、橘樹郡の古代影向寺の造営に協力した都筑郡が、郡内に寺院を造営することにした際、古代影向寺の瓦を生産した窯近くに造営地を選定したということなのかもしれません。いずれにせよ、推測でしかありませんので、将来、三輪瓦窯跡で古代影向寺に瓦を供給した窯跡が発見されることを、期待したいと思います。(続)



(写真) 平瓦に見られる格子叩き (1~3 : 古代影向寺、4~6 : 岡上廃寺)

シリーズ  
「麻生の歴史を探る」 第82話

民間信仰3 石造物～道祖神

小島 一也 (遺稿)

道祖神はセイノカミ(斎、塞)とか、トウロクジン(道陸神)とか呼ばれる道の神様で、通常、村の境や橋のたもと、山の入り口などに、外から来る災い、厄病、災害、邪悪などを防ぐため神が宿した塔を言い、従ってどこの村にも人馬の往来の多い路傍には、「道祖神」と呼ばれる聖地がありました。

私の家は上・下麻生の境に在りますが、当時(昭和初年)巾4mほどの日野往還(神奈川道、現横浜上麻生線)が下麻生の恩廻し部落(現恩廻公園)の道と接する三叉路に2坪ほどの草叢(くさむら)があり、そこが道祖神の宿る所でした(石塔なし)。毎年1月8日を過ぎると、昨年暮れの煤払いの竹や、門松・荒神様(かまどの神)、正月飾りのお札などを集めて、三角型の塔を作り注連縄(しめなわ)を張り、14日の午後一年の息災を感謝して焼いたものです。この事を「セイノカミ」とか「ドンド焼き」とか言いますが、そのルーツは平安時代、宮中での火祭り行事、左義長(さぎちょう、三毬杖)から始まったもので、清涼殿では毎年小正月(15日)庭に青竹を束ねて立て、扇子や短冊を結び付け離し立てて焼いた(大辞典)そうです。それが民間では書初めを焼いて舞い上げたり、子供たちには楽しい「だんご焼き」となりますが、焼け残った門松は、それぞれ持ち帰り家の定口(じょうぐち=入口)に立て、焼いた団子は風邪をひかぬといい家族で食べたものです。

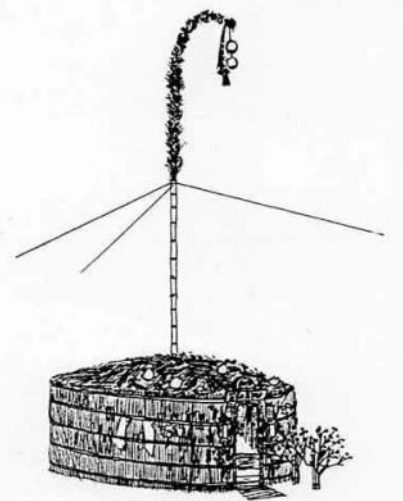
黒川の上(西)の地域に橋場と言う所があります。ここは三沢川の源流で、その昔、鎌倉街道(脇道)の橋が架かり、金剛寺、毘沙門天などの伝承を残す土地ですが、そこには今も嘉永三年(1847)に造られた「道祖神」の石が残されており、昭和30年代までこの地域では、孟宗竹を支柱にして高さ5m、幅4m、周囲を門松や注連縄、お札やダルマで囲い、中には囲炉裏(いろり)が設けられていたそうで、小屋が出来上がると子供達は上級生を先頭に「セイノ神の餅クナ セイノ神の餅クナ」と家を回り御神酒銭(お年玉)を集め、夜は囲炉裏を囲んで雑煮を食べ、お籠(おこもり)をしたそうです(?)。

この黒川の道祖神には繭の形をした石があり(現在なし)、小屋を焼くとき焼いたと言われます。黒川に限らずこの嘉永年間(1848-53)を中心に幕末から明治のその頃はアメリカ通商のシルクブームの始まりで、陰暦で1月15日を小正月と言いますが、「セイノカミ」の14日は年越しの日で、当時はこの農家でも米の粉で繭玉(まゆだま)を作り、1m余の檜の木の小枝に繭の豊作を願って飾り付けたものでしたから、黒川の道祖神の行事もこれにあやかっていたものだったのでしょう。

この「セイノカミ」の神の焼石信仰はあちこちにあり、登戸東(現登戸駅辺)の石は今も保存されているそうです(川崎の民俗=角田益信)。その石は鏡餅形をした3個とのことですが、面白いのはセイノカミの構造の違いで、黒川のそれは高さ5m、中央の孟宗竹は15mに及びその先にダルマやお札を吊るしますが、登戸のそれは門松や煤払いの竹を高さ2mで内側に折り曲げて屋根にし、ワラで葺いた直径4m程の円形の小屋で周囲を正月の飾り物で彩り、出入り口はムシロを吊るし、囲炉裏を掘って、鏡餅石を置いたようです。また、川崎川中島の神明社には、歳の神のお堂があり、繭玉の形をした縦17cm、横11cmの5個の石が収



黒川のセイノカミ



登戸セイノカミのイメージ  
(「川崎の民俗」より)



早野のセイノカミ

められており、セイノカミの日には、子供たちがその石を縄で連ねて引っ張って、「デーサネ、デーサネ、デーサネ(意味不詳)」と叫んでお神酒銭を貰って歩いたとのこと。

岡上の川井田、宮野家の入り口路傍に宝珠の形をした二つの石の上に、小さな角柱石が乗せられたセイノ神が、今も藁葺き屋根が毎年近隣の人達により葺き替えられ保護されています。かつてこの川井田の辻は村を守る道祖神の宿したところで、民間信仰の焼石であったのではないのでしょうか。なお、この岡上の宝珠の焼石、そして、前記登戸のセイノカミのレプリカは市民ミュージアムに置かれています。

参考資料:「川崎の民俗(角田益信)」「くろかわ」「岡上再発見」

## シリーズ

## 時間と時計の話 番外編

## ガラスの靴を巡って (3)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆シンデレラと黄金のリンゴ◆

やがてダンスパーティの終わりの時間がやってきます。お妃候補の娘たちにとっても、皇太子や若き皇帝にとっても、共に緊張はしたけれども楽しかった夢のような時間は終わったのです。そうです。誰もが緊張し、厳粛な気分で迎えるフィナーレの 때가 やってきたのです。お妃選びの決定的瞬間がやってきたのです。

廷臣たちは、揃って壁際に下がり、皇帝と皇后が皇太子の後ろに立ちます。美人コンテストを勝ち抜き、最終審査まで残った娘たちは、お妃候補として広間の中央に並んで立ちます。選ぶのは皇太子自身です。

ビザンツ帝国は、本当にお祭り好き、イベント好きな劇場型国家だと、私もつくづく思うのですが、お妃を選ぶ皇太子の手に載せられているのは、トロイアの王子パリスが手にしたのとまったく同じ、あの黄金のリンゴなのです。皇子は意中の娘に、この黄金のリンゴをそっと手渡すのです。黄金のリンゴを手渡すことが、皇子の意志の表明なのです。選ばれた娘にとって、選ばれたことの証が手の中にある黄金のリンゴなのです。この瞬間、選ばれた娘は、そして残念ながら選ばれなかった娘は、いったい何を考えたのでしょうか。大変興味の持てるところなのですが、残念ながらこの点に関する史料は、何も残っておりません。黄金のリンゴが皇太子の手を離れた瞬間、会場には大きなどよめきが起こり、やがてそれは祝福の拍手に変わるのです。

何人もの研究者がビザンツ帝国における、この時期のお妃選びに関する史料の発掘に努めた結果、今日では以下の事が明らかになっています。

西暦830年の初夏に、前年に17歳にして帝位を継承したテオフィロス1世のお妃選びが行われたこと。この時皇后の座を射止めたのは、小アジア北部のエピッサ村の貧しい農夫の子で、15歳のテオドラという娘だったこと。テオドラの前後のお妃たちも、ほぼ150年間に渡って、いずれも氏素性のハッキリしない娘たちばかりだったことなどです。アテナイの孤児だったり、小アジアの没落地主の娘だったり、コンスタンチノープルの酒場の娘だったり、さらには全く氏素性が分からない娘が選ばれたりしています。ここでは家柄や財産が全く問題とされないからこそ、貧しき娘たちさえも、シンデレラ物語よろしく、お妃の座を射止めることが出来たのです。まさしくビザンツ帝国は、シンデレラの帝国でもあったのです。



ビザンツ帝国の農民 家族が1頭の牛を所有し耕作するのが一般的だった。テオドラ妃の実家もそうだった。



歓呼を受けるテオフィロス帝と皇妃テオドラ  
夫妻の左に官職保有者たちが右には市民たちが並んでいる

## ◆美人コンテストの終焉◆

世界史的にもユニークなビザンツ帝国のお妃選びは、およそ150年ほどで終焉を迎えます。イスラーム勢力(セルジューク朝トルコ)の伸長で、苦境に立たされたビザンツ帝国は、支援を要請したり、同盟関係を結ぼうと考える近隣諸国、さらには国内の大貴族層との連携を深めることが、何よりも重要なこととなったからです。こうして、歴史に誇りうるユニークなお妃選びの習慣は、失われていったのです。何とも残念ですね。

最後に国民の目線に立って考えると、こうしたお妃選びは、どのように見え、どのような役割を果たしたのでしょうか。自分の居住する町や村から、オリンピック選手が誕生したり、歌手や俳優、それに活躍するプロ選手が出たりすると、何となく地域が活気づきますね。現在でもこうなのです。帝国内で最も美しいとされる娘が皇帝の妃となって、帝国のファーストレディとして活躍し、次代の皇帝の産みの母となるのです。もしかしたらそれは、我が村の娘かもしれないし、隣村の娘かもしれないのです。これはもう、国中が固唾をのんで見守る、一大イベントに外ならないのです。

お妃選びは、地方の住民に対して、皇帝を未知の人から、身近に感じられる人に変貌させる役割を巧妙に果たしていたのです。地方住民は、皇帝に対し畏敬と親しみの感情を併せ持つようになって行きます。こうしてビザンツ帝国は、皇帝を中心とした中央集権的な国家体制を完成させていったのです。シンデレラ物語そのままのような、お妃選びの美人コンテストが果たした役割は、ここまで大きかったのです。 完

# 柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**9月** 3・10・17・24日(毎日曜日)

**10月** 7・28日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

(10月14・21日は休館です)

第69回  
カルチャーセミナー

## 江戸時代の勉強会(会読会)に集まる人物像と 日本の近代化への道筋

江戸時代の265年の外国との戦争のない平和な時代に着実に進められていた独自の勉強会グループは会読形式でお互いに切磋琢磨して成果をあげていました。

多くの事例の中から石田梅岩が創始した「石門心学月次の会」と「ターヘル・アナトミア」翻訳会読グループの「解体新書」翻訳成果についてお話しいただきます。

講師：水谷 剛 氏 (日比谷図書文化館 特別研究室ナビゲーター)

日時：9月24日(日) 13:30～ 会場：柿生郷土史料館特別展示室

第13回 特別企画展

## 「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔 その2 ～ 続 昭和時代の柿生地区 ～

昭和30年創刊のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿をご紹介しますが、今回は昭和時代の第2弾です。

期間 8月19日(土)～9月23日(土)

場所 柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会  
第7回史跡見学バスの旅

## 房総半島の鎌倉時代を訪ねる ～頼朝伝説と日蓮上人史跡～

日 時：2017年11月1日(水)

主な見学先：鹿野山神野寺、仁右衛門島、清澄寺と誕生寺

集 合：7時45分 新百合丘駅北口 (21ビル前の歩道)

解 散：18時30分頃 新百合ヶ丘駅 その後柿生駅近く

募 集：44名

費 用：9,100円

申し込み：往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで

必要事項：参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号

送付先：215-0021 川崎市麻生区上麻生6-40-1

柿生中学校内 柿生郷土史料館

(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切 10月5日(木)

問合せ先：小林基男 080-5513-5154 または 044-989-0622



### 柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。

詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。